

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370522

研究課題名(和文)日本語の複文構造が文の読みやすさ/読みにくさに及ぼす影響についての研究

研究課題名(英文)A research on the effect of Japanese Complex structures on sentence readability

## 研究代表者

大島 資生(Oshima, Motoo)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：30213705

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文):従来、直観的・感覚的にしか言及されてこなかった、文の読みやすさ・読みにくさに対して、文の統語構造の視点から明示的な指標を与えることを目的として研究を行なった。具体的には、名詞を修飾する連体修飾節や、いわゆる接続助詞に導かれる節などの複文構造、すなわち文中に文が埋め込まれた構造が文の読みやすさ/読みにくさに及ぼす影響を、スコット・フィッツジェラルドの小説 The Great Gatsby の複数の翻訳からデータを採集し、相互を比較することによって検討した。

研究成果の概要(英文): This study aims to give clear syntactic criteria to sentence readability, which has been mentioned only intuitively in previous researches. The applicant collected complex sentence structures including adnominal clauses and clauses lead by subordinate conjunctions from several Japanese translations of The Great Gatsby by F.Scott Fitzgerald, and studied how these structures effect sentence readability.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語 文法 連体修飾節 接続節 翻訳

### 1. 研究開始当初の背景

従来、文章の読みやすさ／読みにくさは、一般向けの言説においても、専門的な研究においても、直観的な記述にとどまる傾向があり、読みやすさ／読みにくさを明示的に示すことのできる指標を欠いていた。円滑かつ正確に、効率的な情報伝達を行なうには、文章が理解しやすいものであることが重要である。そのためには、日本語文の読みやすさ／読みにくさを明示的に示すことのできる指標が不可欠である。さらに、そういった指標を定めるには、日本語文の特性、殊に文構造に関する検討が有効であった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、従来、直観的・感覚的にしか言及されてこなかった、文の読みやすさ／読みにくさについて、明示的な指標を与えることにある。そのような指標が得られれば、より効率的な情報伝達に寄与するところは大きい。また、検討する過程において、日本語文の新たな特性を見出すことも期待できる。

### 3. 研究の方法

文の読みやすさ／読みにくさに影響する要因としては、文字(特に書体)の選択、語の選択、文構造などさまざまなものが考えられる。本研究では、このうち、文全体の形式を決定づける統語構造に着目した。一般に、文構造上、従属文の埋め込みが生じているとき、さらにその埋め込みが深ければ深いほど理解が困難になるとされている。そこで、本研究では、文が文を含む構造(複文構造)を扱うこととした。具体的には名詞を修飾する連体修飾節、いわゆる接続助詞に導かれる節(以下、「接続節」と呼ぶ)を取り上げて検討した。

データとして用いたのは、外国語を日本語に翻訳したものである。これは、以下のような事情による。読みやすさ／読みにくさを検討する手法としては、同一事象を複数の書き手が記述したものを比較することが有効である。外国文学の、複数の翻訳者による翻訳は、そのような条件を満たしており、データも入手しやすい。研究期間内に行なった具体的な作業は以下のとおりである。

(A)The Great Gatsby(F. Scott Fitzgerald)原文から、関係節、および従位接続詞の導く節、および分詞構文を含む文を抽出する作業を進め、完了した。これと並行して、翻訳文の構造情報としてどのような情報を付加すべきかの検討を進め、暫定的な情報付加のしかたを決定した。

(B)The Great Gatsby の翻訳(5種類)から、(A)で抽出した原文一文に対応する箇所を抽出、原文とともにExcel ファイルに入力した(アルバイタ作業)。アルバイタ作業による

入力データを用いて、暫定的に定めた情報の適切性を検証した。

### 4. 研究成果

#### (1) 観察結果

以下、適宜例を挙げながら観察結果を報告する。なお、データとして以下5種の翻訳を用いた。

大貫三郎訳(1957年)『華麗なるギャツビー』角川文庫

野崎孝訳(1974年)『グレート・ギャツビー』新潮文庫

橋本福夫訳(1974年)『華麗なるギャツビー』早川文庫

村上春樹訳(2006年)『グレート・ギャツビー』中央公論新社

小川高義訳(2009年)『グレート・ギャツビー』光文社古典新訳文庫

文の長さが、読みやすさ／読みにくさを決定する大きな要因の一つである。

(例1) We all looked in silence at Mrs. Wilson who removed a strand of hair from over her eyes and looked back at us with a brilliant smile. [第2章(文番号468)] (大貫訳)みんな黙ってウィルソンの細君を見た。彼女は眼の上にかかった髪の毛を払いのけて、派手に微笑(ほほえ)んで、僕たちを見返した。

(野崎訳)ぼくたちはみんな、黙ってウィルソンの細君を見やった。彼女は眼の上につれた髪の毛をかきあげると、輝く微笑を浮かべてぼくたちを見返した。

(橋本訳)みんなは黙ってウィルソンの細君に視線を向け、彼女のほうも眼の上に垂れかかっていたおくれ毛をかき上げ、こぼれるような笑顔でわたしたちの視線を迎えた。

(村上訳)我々は沈黙したまま、ミセス・ウィルソンが目の上に落ちた髪を払い、晴れやかな微笑を浮かべて我々を見返すのを見ていた。

(小川訳)はたと静まって、みな視線が集まった。ウィルソンの女房は目にかかりそうな髪を払いのけ、きらきらした笑顔になって見返す。

[コメント]橋本訳・村上訳は一文で訳しているが、大貫訳・野崎訳・小川訳は関係代名詞"who"の直前で文を一旦切っている。文を分けることによって、より読みやすくなっている。

(例2) Their house was even more elaborate than I expected, a cheerful red and white Georgian Colonial mansion overlooking the bay. [第1章(文番号62)]

(大貫訳)家は思ったより凝(こ)ったもので、派手に紅白に塗った、ジョージ王朝植民時代風の邸宅が、湾を見おろして聳(そび)えていた。

(野崎訳)二人の家は、入江に臨む予想以上に凝った建物で、明るい赤白二色で塗られ、ジョージ王朝ふうを模した植民時代式の館だった。

(橋本訳)彼らの家は予想していたよりもなお趣向をこらした、ジョージ王朝風をまねた植民地様式の感じのいい赤と白とのマンションで、入江が見晴らせるようになっていた。

(村上訳)彼らの家は、僕が前もって予想していたよりも、さらに見事なものだった。うきうきするような赤と白のジョージ王朝風コロニアル様式の屋敷が、入り江を見下ろして建っていた。

(小川訳)意匠を凝らした美邸は私の予想を上まわった。ジョージアン・コロニアル様式の館が、赤と白の色彩を得て潑瀾と入り江を見おろしている。

[コメント]小川訳のみ、文を切っている。他と比べると理解しやすいように感じられる。

(例3) It came from Myrtle who had overheard the question and it was violent and obscene. [第2章(文番号518)]

(大貫訳)その答えは意外にも、質問を聞きつけたマートルからきた。それも乱暴で猥褻(わいせつ)な答えだった。

(野崎訳)それはマートルからきた。ぼくの質問が彼女の耳にもはいったのだ。猛烈でわいせつな返事だった。

(橋本訳)わたしがそう訊いているのがマートルの耳に入ったらしく、当の本人が直接答えただけでなく、乱暴ないやらしい答え方だったのだから。

(村上訳)その質問を耳に挟んだマートルが口にした言葉は、まことに猛々しく、聞くに耐えないものだった。

(小川訳)ちゃんと耳に入れていて、あけすけな答えをたたきつけたのだ。

[コメント]大貫訳・野崎訳・小川訳が文を切っている。二文に分けてあるほうが読みやすい。

埋め込みがあるほうが読みやすい場合もある。そのほうが日本語らしい文となる。分詞構文を連体修飾節で訳すなど。(例)

(例4) To the young Gatz, resting on his oars and looking up at the railed deck, the yacht represented all the beauty and glamor in the world. [第6章(文番号1616)]

(大貫訳)櫂(かい)に凭(もた)れてしばらく憩(やす)み、レールのついたデッキを見あげる若いギャッツには、そのヨットこそ、この世の美と魔力をいっさいあらわしていたのだ。

(野崎訳)漕ぐ手を休め、手すりをめぐらした甲板を仰いだ若いギャッツにとって、そのヨットは、この世におけるあらゆる美と魅力とを象徴するものであった。

(橋本訳)オールに手をかけ、手すりがつけてあるデッキを見上げていたギャッツ少年の眼には、そのヨットが世界のあらゆる美と魅惑を代表しているように思えた。

(村上訳)若きギャッツは、オールに手をかけて休みながら、手すりのついた甲板を眺め、このヨットは世界の美と栄光のすべてを具現していると思った。

(小川訳)オールにつかまって、手すりのあるデッキを見上げた若者には、このヨットが世界の栄華そのものに見えた。

[コメント]村上訳以外は、"resting"以下の分詞構文を、「ギャッツ(少年)」「若者」を修飾する連体修飾節として訳出している。文の長さなどにもよるが、修飾節として処理したほうが読みやすくなる場合もある。

語順、特にかかり・うけ(いわゆる修飾・被修飾)の関係にある要素間距離が大きいと、理解が難しくなり、その結果、読みにくさ感じられるようになる。

(例5) Laughter is easier, minute by minute, spilled with prodigality, tipped out at a cheerful word. [第3章(文番号624)]

(大貫訳)笑い声が、一瞬ごとにいよいよはずみ、あふれて飛び散り、燥(はしゃ)いだ言葉に弾(はじ)かれて湧(わ)きあがる。

(野崎訳)緊張は刻々にくずれ、笑い声は惜しげもなくばらまかれて、愉快な言葉を聞くたびにどっとばかりに爆笑が沸き起る。

(橋本訳)笑い声も一分ごとにやすくなり、陽気な言葉にそそのかされて惜しげもなくあたりに撒き散らされる。

(村上訳)刻一刻と笑い声は軽やかになり、ふんだんにあふれ、愉快なひとことが引き金となってわっと盛り上がる。

(小川訳)気軽な談笑はますます気軽になる一方で、いかにも屈託がなく、愉快なことが言われるたびに、どっと笑いが振りまかれる。

[コメント]橋本訳は原文に忠実に主語「笑い声」が文末の述語「まき散らされる」にかかる構文にしている。しかし、ほかの訳と比べれば明らかなように、やや読みにくく感じられる。

文構造のみによって文の読みやすさが決定づけられるわけではなく、語彙など各種の要因も関与している。

(例6) Some time toward midnight Tom Buchanan and Mrs. Wilson stood face to face discussing in impassioned voices whether Mrs. Wilson had any right to mention Daisy's name. [第2章(文番号590)]

(大貫訳)真夜中近くに、トム・ビュキヤンとウィルソンの細君が面と向かい合って、ウィルソンの細君たるもの、デイジーの名を口にすると権利があるのかないのか、激しい口調で議論した。

(野崎訳)真夜中近いころ、トム・ビュキヤ

ナンとウィルソンの細君とがむかい合って立ったまま、ウィルソンの細君にデイズィの名を口にする権利があるとかないとか、熱した声で、激論をたたかわしていた。

(橋本訳) 真夜中近い頃に、トム・ビュキャナンとウィルソンの細君とは、顔をつき合せて、彼女にデイジーの名前を口にする権利があるかどうかで、激した声で口論をはじめた。

(村上訳) 真夜中近くになって、トム・ブキャナンとミセス・ウィルソンは、突っ立って顔をつきあわせ、ミセス・ウィルソンがデイジーの名前を口にする権利を有するかどうかについて、高ぶった声で言い合いを始めた。

(小川訳) そろそろ真夜中という刻限に、トム・ブキャナンとウィルソンの女房が顔をつきあわせて、立ち話の声を荒くした。こんなところでデイジーの名前を出すな、というのが争点のようだ。

[コメント] 「権利」"right"という語を原文通り訳出するかどうかで違いがある。また、小川訳の「立ち話の声を荒くした」という表現はやや不自然に感じられる。

## (2) 反省

今回の研究の反省点としては次のようなものが挙げられる。

読みやすさ / 読みにくさを評価する尺度について、さらに検討が必要である。いくつかの段階を設定することを試みたが、評価基準の確定には至らず、自然に感じられるか不自然に感じられるか、大きく二つに分けるとどまった。

原文が非常に個性的で、訳出の難しい文章である。翻訳の比較にはより平易なものを選ぶべきであった。

## (3) 研究の今後について

現代日本語には分詞構文に相当する構文がない。そのため、訳出に当たってはさまざまな構文が用いられることとなる。(1)で述べたように連体修飾節を用いる場合もあり、また、以下の例のように独立した文として扱う場合もある。

(例7) Daisy and Jordan lay upon an enormous couch, like silver idols, weighing down their own white dresses against the singing breeze of the fans. [第7章(文番号1899)]

(大貫訳) デイジーとジョーダンが途方もなく大きい寝椅子(カウチ)に横になっていたが、扇風機の歌うような微風に、白いドレスを煽(あお)られまいとして、重味をかけている、銀の偶像みたいだった。

(野崎訳) デイジーとジョーダンが、巨大な寝椅子に身を横たえて、銀製の偶像というか、扇風機のまき起す颯々たる風に舞う白衣を静かにおさえていた。

(橋本訳) デイジーとジョーダンは、銀色の偶像が、いくつもの扇風機のさえずっている

微風に、白いドレスがあおられないように、自分のからだで重しをかけているみたいにして、でっかい長椅子に寝そべっていた。

(村上訳) デイジーとジョーダンは広々したカウチに、銀でできた偶像みたいに横になっていた。

(小川訳) デイジーとジョーダンが大きなソファに倒れ込んでいる。銀の神像が二体ならんでいるようだ。ぶーんと音を立てる扇風機の風に逆らい、それぞれの体重によって白いドレスを飛ばされまいとする。

(例8) The bottle of whiskey--a second one--was now in constant demand by all present, excepting Catherine who "felt just as good on nothing at all." [第2章(文番号567)]

(大貫訳) いまはそこにいた誰もが、ウイスキーの瓶 二本目 をたてつづけにひき寄せた。呑(の)まないのはキャサリンで、彼女は「全然呑まなくても、呑んだみたいに、いい気分になった」

(野崎訳) ウイスキーの瓶 といっても二本目のやつだが それにしょっちゅう、四方八方から手が出るようになった。ただ「何も飲まなくてもいい気持だ」と言うキャサリンだけは例外だった。

(橋本訳) その頃にはみんなもしきりにウイスキー瓶に 二本目だったが 手を出さようになっていたが、キャサリンだけは例外で、「わたしはぜんぜん飲まなくても陽気になれるたちのよ」と言った。

(村上訳) ウイスキーの瓶(二本目だ)がみんなの手から手へと忙しく移動した。ただキャサリンだけは「何もいまだかなくても、このままでじゅうぶん気持ちいいから」ということで、酒はまったく口にしなかった。

(小川訳) ウイスキーのボトルが もう二本目になっている 引っ張りだこで飲まれていた。キャサリンだけは「全然飲まなくても酔った気分でいられる」とのことで手を出さない。

なお、古典日本語、特に平安和文で多用された「～とて」は英語の分詞構文に似通った性質があるように見受けられる。ちなみに、鈴木泰(2009)『古代日本語時間表現の形態論的研究』(ひつじ書房)は「～とて」の形式で現われる終止形を「分詞」と呼んでいる。

今後は分詞構文と、それに対応する訳文を対象に、日英対照研究的手法を用いて研究を継続する予定である(平成28年度~30年度科学研究費基盤研究(C)「現代日本語における統語的階層性についての研究 - 英語分詞構文との対照から - (課題番号16K02730) )

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

大島資生「連体修飾節からみる現代日本語アスペクト」『人文学報』512-11 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1～18 2016年3月 査読なし

大島資生「現代日本語における形容詞連用形・テ形の機能について」『人文学報』507 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1～18 2015年3月 査読なし

大島資生「現代日本語の非制限的連体修飾節の特性について」小林賢次・小林千草編『日本語史の新視点と現代日本語』勉強出版 pp.472(151)～459(164) 2014年3月 査読なし

大島資生「現代日本語オノマトペ「くるくる」「ぐるぐる」の意味」『人文学報』492 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1～19 2014年3月 査読なし

〔学会発表〕(計 1件)

大島資生「現代日本語の連体修飾節におけるアスペクトについて ル形とテイル形が交替可能な場合」2015年度華南理工大学・首都大学東京中日言語文学合同研究会 2015年8月25日 於 華南理工大学 広州市(中国)

〔図書〕(計 1件)

益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦共編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房 2014年2月 総ページ数736

大島資生担当部分：

pp.3～24(前田直子と共著)「連用修飾節・連体修飾節構造に関する研究の動向と課題」pp.197～211「外の関係の連体修飾節におけるテンスについて」

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大島 資生(Oshima Motoo)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：30213705

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：